菅生中学校吹奏楽部の演奏で華々しくオープニング。司会は菅生小の子どもたち。口調のあいさつの応援にコスミンとメローも参加。

第１回は 700 人の参加者が、第２回ともなると 1300 人も。手つなぎの輪が大きく大きく広がりました。まつりを通じて子育ての輪を作ろうという試みは大成功！　もっともっと大きくなれと、第３回へと実行委員会は始動しています。

2014/12/7

♫♪ 菅生音楽祭♫♪

菅生中体育館にて

「地域で支え、音楽で生きる力を育てよう」をテーマに菅生体育館で開催されました。400 人を超える来場者で大盛況でした。地域団体のほか、菅生中、菅生小、稗原小、南菅生保育園、菅生保育園の子供たちが参加しました。最後に菅生中吹奏楽部の伴奏で会場の皆さんと「ふるさと」を合唱しました。幅広い年齢層で地域の暖かさが伝わる音楽祭でした。当日は、先生方や地域の方、中学生による会場設営等、ご協力頂き感謝しております。

◆菅生中学校区地域教育会議では、上村君の事件を「対岸の火事」とはせず、様々な場で多くの人と語り合おうと取り組んでいます。◆最近の菅生の子どもたちも「俺じゃネ～よ」「言われたからやった」とよく口にします。上村君を殺害した主犯格の少年にカッターナイフを渡した少年は「渡しただけで俺じゃネ～よ」と言い、17 歳の頬を切りつけた少年は「言われたからやった」と言います。◆程度の差こそあるものの、同じ心の動きを菅生の子どもたちも行っているのです。心が丈夫な子どもたちをみんなで育てていきたいものです。（事務局）

地域教育会議 HP へ GO

http://sugaochikyou.web.fc2.com　E-mail:toraianguru@mx81.tiki.ne.jp

菅生中学校区地域教育会議ニュースレター（61）

とらいあんぐる菅生

２０１５年６月２４日（水）
発　行：菅生中学校区地域教育会議
編　集：情報委員会
当番校：稗原小学校　☎：976-4557
事務局：菅生こども文化センター
TEL&FAX: 976-0444

特集　川崎中１殺害事件

２月２０日。川崎市の多摩川河川敷で全裸の男性死体が発見され、それが中学１年生の上村遼太君と判明した。さらに、上村君を殺害したのは、17・18 歳の少年３人とわかり、世間を驚かせた。

島根県西ノ島から６年生の時川崎に引っ越して来て、友だちからは「カミソン」と呼ばれてしたわれていたバスケットボール好きの純朴な少年に何があったのか。その詳細は報道された範囲でしか知る由もないが、その死を悼む人たちは後を絶たず献花は山のようになっている。

地域教育会議は、宮前平で起こった「金属バット殺害事件」に端を発してもいる。さらにこの時期、横浜・川崎でホームレスを襲う事件や町田市の忠生中学校で、教師が生徒を刺すという事件が続いた。なぜこのような事件が起きたのか、また川崎で二度とこのような痛ましい事件が起きないようにと設置されたものだ。その地域教育会議が今回の事件を素通りすることは許されない。

今回、菅生中学校区地域教育会議では道ですれ違う子どもも我が子のことと考えようとする「道親ネットワーク」のメンバーを主体に座談会を開催し、より多くの人が考えるきっかけとなるようにとの願いを込め、本紙「とらいあんぐる」に掲載することとした。ぜひお読みいただき、あらゆる場面をとらえてこの問題を熱く語っていただきたい。以下、4 月 18 日に行われた道親ネットワークの座談会の要旨。

道親での座談会

◆この事件を知って最初に思ったことは？

Ｔ：この事件が最初に報道された時、川崎市内ということだったので「不安」が先行しました。子どもが殺された親の立場を考えると、さぞ悔しいだろうと思います。

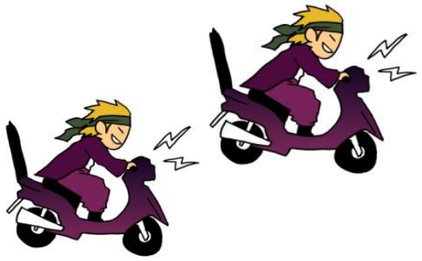
Ｎ：事件の内容が明らかにされてくると、カッターナイフで首を切ったとのこと。指を切っただけでも大変痛い思いをするのに、何故首を切るなどという残忍なことができたのだろうか。人の痛みを思いやることが出来れば、このようなことはできるはずがないと思いました。

◆事件と母親

Y：いやな事件で「母親は何をやっていたの？」というのが率直な気持ちです。目に痣を作り、あれだけ顔が腫れあがっていたのに・・・。
S：島根の島から川崎の両親を頼って来た母親も働くことに精一杯じゃなかったのかと思う。母親を責めるわけにはいかないのでは・・・。
Y：勿論、母親を攻めようとは思っていないけれど、でも私は最終的に子どもを守るのは母親のような気がする。
M：シングルマザーは稼ぐことに精一杯なのでは？　身近に離婚する親から相談を受けたのだけど、子どもは友だちがいなくなるからとこの地に残りたいと言い、父親と暮らすことに。本当に子育てができるか心配で・・・。
I：上村君も環境が変わって、仲間がほしかったのだろうと思う。自分も昔は転校を繰り返していたけれど、友だちを作るのには、子どもなりに相当なエネルギーが必要でした。
M：そう。その親が離婚する子も中学生になり、それだけでもエネルギーが必要で、友だちを作り出すエネルギーが残っていないと感じた母親は、子どもを残すことにしたの。母親の限界を感じた出来事でした。
S：親が子育ての原点とは思うけど、親としての限界があるからこそ、親身になれる周りの大人がいるのではないかな。親もSOSを出して一緒に関われる人とコンタクトをとれればいいと思うけど、働くことに精一杯だったらそれも無理なときもある。

◆思春期という時期

H：上村君は思春期まっただなかの時期を迎えていました。私の今までの経験からして、親から虐待を受けていた子でも親をかばい、親からは暴力を受けていないと言い張ります。それだけ親を思い親から受容されたいと思っているのが子どもの姿なのです。思春期に入れば、親から独立しようという気持ちが芽生え、よけいに親に心配させまいという気持ちが強くなる。だから親に嘘をついてまでも「平気」と言うようになる。上村君も忙しく働く親に心配かけまいという気持ちが働いていたのではないでしょうか。



T：ただでさえ難しい時期で、反抗したり、隠し事が始まったり、大きく変化する時ですよね。
I：でも上村君が偉かったと思うのは、グループに万引きを強要されたのに断ったこと。今の中学生にここまでやれる子は少ないと思う。
N：それだからこそ痣をつくるほど「制裁」を受けたわけだけど、それを見た友だちがグループのリーダーの家に押しかけ謝罪を求めたことはすごい事だと思う。だけど、中学生だけで事を運ぶのではなく、大人への相談も必要だったのでは？

◆もう少し大人が一歩踏み込んでいたら

S：その時、家の人の通報で警察が来たのだけれど、18歳少年が携帯電話で上村くんに謝っている。その電話で「もう解決しました」の言葉で警察は帰ってしまったと報道されています。
T：その時に、警察が上村くんに、詳細な事情をきちんと聴いていて対処していてくれたら違う展開になったと思うのだけど。
H：学校もそうですね。何回電話したから、そして１回通じて「もうそろそろ行こうかな」という電話でのやり取りではなく、きちんと状況を把握する作業が必要だったのではと感じています。そして事件後に「スクールカウンセラー」が配属されたようですが、忙しい教師にすべて負わせるのではなく、すべての学校にカウンセラーを常駐して心の相談に応じる仕組みづくりが必要だと思うのです。

年		出　来　事
2013	９月	島根・西ノ島から、川崎市の小学校に転校
2014	４月	川崎市の中学校に入学。バスケットボール部に入部
	９月以降	部活を少しずつ休むように
	12月ごろ	逮捕された18歳の少年と知り合う
2015	１月８日	冬休み後、上村さんが不登校に
	中旬	上村さんが18歳の少年に殴られ、目の周りに黒いあざができるなどの大けが。
	２月12日	上村さんの友人ら数人が18歳の少年宅を訪れ、殴ったことへの謝罪を要求。警察官が出動する騒ぎに
	19日深夜	飲酒していた18歳の少年ら３人に上村さんが合流。多摩川河川敷に向かう。
	20日午前２時ころ	河川敷で上村さんが殺害される。
	午前６時過ぎ	河川敷で上村さんの遺体を通行人が発見。
	27日	18歳の少年を含む３人を殺人容疑で逮捕。

◆携帯は便利なツールだが

M：ゲームなどを含め携帯を使っている時間は、中学生が平均５時間、高校生になると平均８時間というデータがあります。便利なツールですが、体温が通じるコミュニケーションがなくなっているのが現状。電話で話が出来たから安心するのではなく、対峙して話し合う必要が不登校などの場合には絶対必要ですよね。
T：私は電車に乗る時に、子どもが飽きないように本やおもちゃをもって乗り込んだが、今は携帯をもたせて子どもを遊ばせている時代。
I：それは子どもが騒ぐと周りの冷たい視線を感じるから・・・。
S：便利なツールでも、それに頼りすぎるのはどうかしら？　母親でも携帯依存症のような人が多く、子どもが遊んでいるところに目線がなく、平気で携帯でメールを打っている人が多い時代。
N：上村君も「遊びませんか？」とメールしたことによって惨劇にみまわれてしまったのだが、寂しくて誰かと遊びたかったのでは？　こども文化センターでも利用して、もっと誰かと話していたら少しは気が晴れたのではと思うのですが。

◆「誰か」ではなく「私も」

H：この前、他の所でこの問題を話していたら、「中学生になると怖くて」という意見があり、関わらなくてはと思ってもなかなかできないと言われました。
I：直接が難しいなら、間接的でもいい。学校や子どもに関わる施設に話を持っていく必要はあるのではないでしょうか。
M：そして地域の子どもたちを見守るネットワーク作りが必要で、ただ見守るだけでなく声を掛け合うネットができると良いと思う。自分ができる所で、できる立ち位置で、自分のやれることはやる。そして大人も一人で考えないよう支え合う仲間づくりが必要です。
H：そうですね。菅生地域の中にある学校や子育て施設、PTAや自治会等あらゆる組織で子どもたちを見守り育てる町にしていかなくてはなりませんね。そして、子どもたちにも大人たちにも何かあったら勇気をもって学校や子育て施設のどこででも相談していただければ、もっと恣意的に「道親ネットワーク」は親身になって一緒に考えていくこととしていきましょう。
　最後に「カミソン」の冥福を祈り黙祷をささげて座談会を終わりたいと思います。
　黙祷。

「地域の寺子屋事業」

TE・RA・KO・YA

【プラス１学習会】
DATA=菅生中学校プラス１：英数・年間29日実施　菅生小学校ふれあい学習：3年生算数ソロバン6時間　稗原小学校算数名人：2年生算数掛け算6時間
　菅生中プラス１は、部活動の無い試験前の放課後や夏休みに実施。学習範囲、試験範囲に合わせ、習熟度向上を主眼にしたプラス１ドリルを講師陣が作成し取り組む。１年生の８０％が１回は参加している。プラス１の楽しみは「分からないところが分かるようになった」がアンケートで第１位。

【体験・世代間交流】（すがおこども大学風景）

「はぐるま農園」で
里芋を収穫し芋煮会

和の心でお・も・て・な・し
初釜でお茶を点てて

26年度より川崎市の新事業「地域の寺子屋」が始まりました。菅生中学校区地域教育会議ではモデル事業として11月より実施しています。学習支援と体験・世代間交流がメインテーマ。学習支援は菅生中における「プラス１学習」を寺子屋事業とし、体験・世代間交流は、「すがお手つなぎまつり」、「菅生音楽祭」をはじめ、毎月行われている菅生こども文化センターの「すがおこども大学」と連携しています。地域の方などが寺子屋先生となって、学習のサポートや楽しい体験活動をすすめています。これまでの菅生の活動を寺子屋事業として位置づけているのが特徴です。